

新たな真相解明に向かって (Part 1)

堂 本 彰 夫

2021 年 9 月

<連絡先>

ホームページURL⇒<http://www.gakuyou.jp>

メール・アドレス ⇒gakuyou17@outlook.jp

目 次

- ① 何を、どうすれば、さらなる真相解明に至れるのか？横たわる、「三つの大きな山（謎の塊）」?! 1
- ② まずは、最大（第二）の山（謎の塊）?!「（崇神～）応神（～継体～欽明）期」！ 4
- ③ その最大（第二）の山（謎の塊）は、「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きと関連している?! 7
- ④ 改めて、「応神（天皇）」を、「伽耶・新羅系勢力」と「百済・北方系（扶余系）勢力」の「合体（天皇）」としてみると、果たしてどうなるのか?! 10
- ⑤ 「太宰府」は、「（九州）倭国」の首府であった?!「倭の五王」時代の真実?! 13
- ⑥ 「物部氏」「葛城諸族（蘇我氏）」（筑紫倭国?）、そして、一方の「息長氏」「秦氏」（豊国倭国?）が、第三の山（謎の塊）をつくった?! 16
- ⑦ 「葛城氏」と「息長氏」の近畿移動、しかもセットで?では、いつ頃、どのように? 19
- ⑧ 次が、第一の山（謎の塊）?「邪馬台国（連合）」前後の「倭国（種）」の実態?!「安曇族」の全国展開（海洋交易）と「（倭）奴国」のその後?! 22
- ⑨ 「安曇族」と「カモ（鴨/賀茂）族」の東方移動?!まずは、彼らが、「倭国→日本国」への契機（原形）をつくった?! 25
- ⑩ 「吉備」で力を蓄え、「出雲」→「近畿／大和」に移動（進出）した「ワニ（和邇/和珥）族」と「カモ（鴨/賀茂）族」?! 28

① 何を、どうすれば、さらなる真相解明に至れるのか？横たわる、「三つの大きな山（謎の塊）」？！

とにかく、「私的日本古代史考～建国の真相はいかにあったのか?!～」と題する、私の「古代史の旅」は、昨年、一応の終わりを遂げていた（「試作版」の作成）。だが、ほぼ？やり終えたという思いは、もちろんあったが、一方では、まだ十分な納得も得られず（新たな課題や疑問も感じられ始め、その壁の大きさに恐れをなしていた？）、この間、随分と「一休み」をしていた！ただし、その間、手持ちの本や資料の読み直しや他の情報も得ながら、新たなアプローチを考えていたことも事実であり、最近、その「修正試作版」を作成した次第でもある！

そこで、以下、ここでは、それを土台にして、「新たな真相解明に向かって」と題して、決意も新たに、次なる「旅」を目指すこととした?!それは、当然、さらなる史実？（解き明かしたい真相）の、単なる追加（上積み）を行うということではなく、標記のタイトルのような視点を論の基軸としながら、より精緻な考察をなしたいということである。そして、それは、まさしく今、鋭意準備を始めている「最終版」作成の、さらなる補強にしたいということである！

と言うのも、そうした論の基軸がないと、やはり？相変わらず情報の渦（密林？）に巻き込まれ（迷い込み？）、全体として何を明らかにしようとしているのかが分から（見え？）なくなってしまうからである?!否、重複や堂々巡りの方が、徐々に顕著となってきているということである?!

さらには、全体の意義も分からずに（分かってとせずに？）、他人の成果をつまみ食いしてきたという、ある種の申し訳なさ（恥ずかしさ？）が、徐々に頭を擡げてきているということでもある?!

その大きな原因（もちろん、最終的には、私自身の責任ではあるが！）は、端的に、「倭国近畿大和説（←邪馬台国畿内説）」と「倭国九州説（←邪馬台国九州説）」の無秩序（失礼ではあるが、無邪気？）な並走状態にあると思われるが、とは言っても、繰り返しになるが、そのことを超克するだけの説得材料も、交通整理能力もない私ではあるので（当然ではあるが！）、今はまだ、それに甘んじなければいけないのでもある！

いずれにしても、「記紀」によって創られたであろう建国史の、言わば「舞台装置（シナリオ?）」みたいなものがあるわけであるので（知れば知るほど、その実感は募る!）、それを何とか、自分なりにまとめてみたい！今、そういう思いで一杯なのである（本当に、そこには、多種多様な情報・研究成果？があるものである！そして、多分？そこには、もう既に、史実解明の材料自体は揃っているのかもしれない?）！

そんな中、今回私が、改めて重要視したい視点（解明の起／基点?）は、中国（当時の「唐」→945年の『旧唐書』）からみた「倭国（九州?）」と「日本国（近

畿大和?)」の並立(相剋?)の実態ということになるが(そこには、「倭国伝」／「日本(国)伝」の双方があり、当時の「唐」側には、「二つの(倭)国?」が認知されていた!)、それに対応する(時代の)日本側の記述(「記紀」)が、それと、どのように整合化されるのかということである?!

たとえ、情報不足や誤解・曲解があつて、認識に混乱があつたとしても、そのこと自体(「倭国」と「日本(国)」の並立的存在?)は、大枠では真実であつたと言わざるを得ないのである!何故なら、そのこと自体で、「唐」側が、嘘をつく必要はまったくないからである(認識への矜持もある?)!それくらい、当時の中国(唐)にとっては、倭国の実態(実体?)は自明のことであつた?!

そこで、今回の新たな旅は、そのことを切り口(出発点)にして、そうした「二つの(倭)国の並立と相剋?が、我が国の建国史をなしている!」ということの解明(証明?)を、改めて行っていけばよいということになるわけであるが、具体的には、どのような解明の方法(段取り)が考えられるのかである?!

ただし、これについては、これまでも何度も述べてきたが、例の「倭の五王時代(5世紀)」、つまり、『宋書』等が示すそれらの記事と、一方の「記紀」が示す「(崇神→)応神→雄略」辺りの記事との整合性(真実?)を、いかに解明するかであろうことは言うまでもない!さらには、その後の「継体→欽明」辺りの記事も、当然視野に入ってくるであろう?!

そして、もちろん、そこでは、かの「天日矛^{あめのひぼこ}(ツヌガアラシト?!)」 「神功皇后」「武内宿禰」「住吉大神」等の絡み、あるいは「伽耶(加羅)」「新羅」「百濟」等との対外関係(「高句麗」の動きとも関係して!)が大いに関わってくるわけであるが、それら(の謎?)が、「二つの(倭)国の並立と相剋?」という視点で、どのように解きほぐされてくるのか?そこがポイントとなるということである!

とは言え、その辺りの真相が、これも繰り返しになるが、「記紀」においては、まったく見えてこない(隠されている?)ということでもある?!私の立場からすれば、「記紀」編纂者達(直接的には、「持統・藤原体制」!)が、そのように目論んでいるということであるので(かなり定説化されてきている?)、まさに当然ではある訳である?!

いずれにしても、今現在、改めて意を強くして思うことは、実際に、そこで繰り広げられたであろうことが、中国側(当時の「唐」→『旧唐書』)からみた「倭国(九州?)」と「日本国(近畿大和?)」の並立(相剋?)ということであつたわけであるので(つまり、そのプロセス・内実が、中国側(「唐」)の認識の根拠でもあつた?!→そうとしか考えられない!)、そうした視点に立った史実の解明(論証?)がなされなければならないということである!

逆に、そう出来なければ、中国(唐)側の認識そのものが間違っていたこと

にもなるわけであるが、単純に言えば、1世紀代の「(倭→倭) 奴国」以降(「邪馬台国」時代も含めて)、「倭国」自体(本体)は九州にあったのであり(→かの663年の「白村江の戦い」の主体は九州倭国であった?!)、一方で、中国(唐)側が公式には認めていない(知らない?)近畿倭国(「日本国」)が別に生まれ、発展し、その双方の国の情報(使者?)が、ある時に(から?)同時に、中国(唐)側へ入ってきたということである?!だから、混乱した?!

しかしながら、明らかに、「記紀」(持統・藤原体制)は、その後者の立場で、「倭国(→日本国)」史をまとめ上げている(かなりの矛盾や不審点を示しながらも?)?!しかも、事実の大枠としては、そうなっているわけでもある?!したがって、要は、これを、いかに正確に解明(証明?)するかなのである?!

しかるに、「記紀」(持統・藤原体制)は、「崇神」(第10代)以前の歴史(3世紀以前?)は、自らの政権の正統性/正当性(の淵源)を遡及させるべく(「万世一系」)、様々な文書・言い伝え等を駆使して(知り得ていた事実を核として?)、そして、自らに同調・加担した氏族・勢力(中臣氏/息長氏/秦氏/賀茂(直)氏等)に配慮(忖度?)しながら、神話や関係人物の事績話を創り上げた?!

そして、一方で、「(645年の)乙巳の変(大化の改新)」以降の歴史は、自ら(持統・藤原体制)の直接の先祖達が行った所業(悪事?)を出来るだけ量し(はぐらかし?)、他方で、正統・正当な「蘇我氏(上宮王家?)」の存在と活躍(「物部氏」「葛城氏」「尾張氏/海部氏」「紀氏」等→「武内宿禰」諸族?を含む?!)を歪曲(抹殺?)し、その史実を隠した?!

もし、そうであれば、「記紀」(建国史)の謎は、大きく捉えれば、「倭の五王以前」、「倭の五王時代」、そして、「倭の五王以後」の、言わば「三つの大きな山(謎の塊)」として構成されているということになる?!それが、「神武~崇神」「崇神~応神」、そして、「応神~持統(推古?)」ということであるが、それ故に、今後は、この「三つの大きな山(謎の塊)」を、いかに捉え、そして、それらを、いかに整合的に解明するのかということになる?!

ただし、事実上は、その中の「倭の五王時代」、つまり「崇神~応神(正確には、~継体~欽明を含む!)」の真相が最も大きな山(謎の塊)、順番的には「第二の山(謎の塊)」となっていることは明白であり、その解明が重要な鍵となっていることは言うまでもない?!だが、これもまた繰り返すが、ここの部分が、一番量されている(荒唐無稽化されている?)わけであり、逆に言えば、それだからこそ、最も核心の部分であるということでもあるわけである?!

ちなみに、そこには、関係氏族・勢力の、それこそ一族・類縁の命運を賭けた必死の攻防(生存競争)があったことが容易に推測され、それを知らされる我々には、誠に迷惑な話となっているのでもある(つまり、この現代に至るまで、自国の歴史/建国史が分からないという情けなさ?が続いているわけである!)?!

② まずは、最大（第二）の山（謎の塊）?!「崇神～応神（～継体～欽明）期」!

ということで、まずは、その三つの山（謎の塊）の中心とも言うべき「第二の山（謎の塊）」、「崇神～応神（～継体～欽明）期」（「応神」自体は、4世紀末?）の真相（怪?）を、どのように解明（説明）出来るかである?!もちろん、そうならざるを得なかった（「第二の山（謎の塊）」となった）理由（原因?）がそこにはあるということであるが、改めて、その理由（原因?）とは何なのか?

すなわち、その「崇神～応神（～継体～欽明）期」が、国内外において、量的にはもちろん、質的にも大きい様々な変化（人や場所の移動等も含めて!）が顕著だということであるが（考古学的には、騎馬民族的な、あるいは百済系の文物・事績の多出!）、その経緯の中で、後の「倭国（→日本国）」の実体（二つの倭国?）が形づくられたことは間違いないと思われるのである?!

繰り返しになるが、「記紀」（持続・藤原体制）は、その辺りの事情（史実?）を最も暈したり、はぐらかしたりしているわけでもある?!だから、最大の山（謎の塊）ともなっているのでもある?!

例えば、「応神」（第15代。ただし、実際は、彼に仮構された人物がいる?）が、朝鮮半島からの渡来系（扶余／高句麗系、いわゆる「騎馬民族系」、その血脈を有する「百済系（王族）」）であることは、ほぼ間違いないと考えられるが（そのこと自体はそれでよいのである!事実であれば、当然である!）、問題（謎?）は、その「応神」が、「記紀」では、「神功皇后（息長足おきなががたらし姫）」と「仲哀ちゅうあい天皇」（「崇神」「垂仁」「景行」と続く、いわゆる「大和朝廷（天皇家）」の嫡流で、直接的には、「景行」の子の「ヤマトタケル命」の子）の子とされているということである!

しかも、その父親である「仲哀天皇」については（も?）、非實在（ダミー?）の可能性もあり、一方で、「武内宿禰」あるいは「住吉大神」が、その父ともされているようなものでもある?!真に、困ったものなのである?!

そして、さらに困ったことに、その母親とされる「神功皇后（息長足姫）」も、例の「卑弥呼」ないし「台与」のダミー?とも考えられており（←紀年120年の繰り上げによって!）、そうなると、他ならぬ、その「応神」自体の出自あるいは、その血統はどうなっているのか?という（「胎中天皇」と言われたり、越の敦賀で、「気け比ひ大神」（伽耶王子ツヌガアラシト）と名前を交換したりと、幾つかの信じられない?説話が記されている!）、実に不可解（不都合?）な事態を招くのである!

そしてまた、これは、上記とは別次元の話ではあるが、彼は、百済系の王族とは考えられるが、二人の別人（百済残国兄王「滕とう」／本家?沸流びりゅう系王族と「毘支ひし」／支流?仇台くで系王族）が、その候補と考えられているのもある（前者が兼川晋説、後者が石渡信一郎説）!改めて、一体これは、どういうこ

とになるのか？

さらに、それと、もう一つ謎（怪？）なのは（こちらの方が、より大きな意味を有している？）、その「応神」が、いわゆる「八幡やわた大神」とされ（「宇佐神宮」の主祭神？）、おそらく？「新羅系」の祭神ともされているということである！ただし、このことについては、母親（神功皇后／息長足姫）が、新羅系の「天日矛（ツヌガアラシト?!）」の血脈とはされているので、一応は、首肯されないこともない?!

であれば、父親の「仲哀」が「百済系」なのか？しかし、その「仲哀」の父親とされる「ヤマトタケル命」自体も、非実在の可能性が高い人物なのでもあり、その辺りがまったく分からなくなるのである（むしろ、彼に纏わる「武内宿禰」や「住吉大神」との関係が問われてくる?）！

ということで、現時点では、これ以上の解明（追跡?）は難しいのであるが、一方で、冷静に考える（見方を変える）と、その「応神」が、渡来系の「百済」と「新羅」の合作（融合?）人物ということは考えられないか?!というのも、「記紀」（持統・藤原体制）は「百済系」ではあるが、その背後には、「新羅系」の「息長氏」（そして、「秦氏」も?）の姿が見え隠れするからである！

つまり、「神功皇后」の本名?は「息長足姫」であるし、後の「舒明（田村皇子）（第34代天皇で、「皇極」の夫）も、実は、「息長足日広額たらしひひろぬか天皇」という和風諡号を有しているのである！

そこで、もし、「百済系」（の誰か）と「新羅系（息長氏）」が、いつの頃からか協力関係を結んでいる（婚姻している?）としたら、その「百済系」と「新羅系（息長氏）」の合作（融合?）話は、俄然真実味を帯びてくることになる?!端的に、その両者が、いわゆる「合意」の下に、「記紀」のストーリー（少なくともその部分?）を創り出したと言えないかということである?!

ちなみに、その「息長氏」は、当初、『隋書（636／656年）』に出て来る「秦王国（豊前／香春岳かわらだけ周辺?）」に居住し（製銅・製鉄氏族?その地に、「韓国息長大姫大目からくにおきながおおひめおおま命」を第一の祭神とする「香春かわら神社」がある!）、「応神」もまた、北部九州（宇美?）で生まれ、そこから東に向かって進出したことになっている！ならば、そこ（北部九州）に、「息長氏（新羅系）」と「応神（百済系）」の関係が出来上がっていたと言えないか?!

なお、その傍証として、「応神→八幡大神」の、「宇佐神宮」での主祭神化があり、また、その「宇佐神宮」は、上記の「香春神社」とは、密接な関係（共同祭事）がある?!もし、そうであれば、「応神」の実体（正体?）は、かなり鮮明に炙り出されてくる?!

だが、そこでも厄介なのは、その「息長氏」は、周知のように、「琵琶湖東岸」を根拠地とした、近畿の有力豪族の一つともされていることである！そし

て、その対岸（琵琶湖西岸）からは、これもまた不可思議な「継体（第26代）」という人物も出ているのである！しかも、詳しい経緯はともかく、「記紀」によれば、後の「持統・藤原体制」は、その「継体」から生じているのでもある！

そして、その間には、これもまた、実は不可思議な「欽明（第29代）」という天皇（蘇我氏の実祖？上宮王家？）もいるのであるが、通して言えば、「応神」から「継体」、そして「欽明」へと続く、一連の繋がり（「万世一系」）が、本当にそうだったのかどうか？それとも、実は違っていたのか？その辺りが、よく分らない？そういうことにもなるのである（もちろん、「応神」と「崇神」の関係もそうである？）！

そこに、改めて、「物部氏」「蘇我氏」「葛城氏」「尾張氏」等、さらに、そこには、実は「秦氏」や「賀茂（直）氏」も絡まってくるのである！そして、彼らの足跡と関係は、その後、かの「淡海三船」によって示唆（漢風諷号）されているように？、「神武」「崇神」「応神／神功皇后」の「神関係（トリプルスピルン?）」として描かれているということである?!

しかも、それは、「応神／神功皇后」を起（基）点とした、「近畿倭国→日本国（大和朝廷）」を形成してきた氏族・勢力の関係（時代順も?）を示しているとも思われるのである?!ある意味、大変な構想力、否、トリックと言える?!

いずれにしても、「記紀」は、このような関係諸氏族の利害得失あるいは氏族・勢力関係の中で、その中の「勝者側」が、自らに都合のいいような「歴史（国史）」として書き上げられたものだということでもあるが、その中心に（黒幕として?）いたのが、「藤原氏（「不比等」）」であったわけでもある（「不比等」という名前が、そのことを如実に示している?→不遜極まりない名前?）！

ちなみに、それらは、「江南系」（漁撈・農耕・交易民／安曇族・海神わたつみ族）→「伽耶・新羅系」（製銅・製鉄・交易民／山祇やまつみ族）→「百濟・北方系（扶余系）」（製鉄・土木／騎馬・部族民族）の渡来と関係を、一方で暗示しているということも考えられる?!

すなわち、それらは、まずは「北部九州（朝鮮半島南端部を含む!）」の「江南系倭人（安曇族・海神族）」（その根拠地が「（倭）奴国」。「環濠集落」や「銅鐸」等の保有者）が全国に広がり、その後「倭国大乱」（2世紀末）を契機として、「伽耶・新羅系倭人」に、その覇が移り（「伊都国」から「宇佐」「吉備」「出雲」、そして「近畿」等に進出?）、そして、最後に「百濟・北方系（扶余系）倭人」が、中北部九州（筑後川沿い）から、全国に広がっていった?!

それ故に、ここで言う「三つの山（謎の塊）」とは、換言すれば、上記の、三つの「渡来系倭人」の事績のことを指すこととなるが、これらは、果たしてどうなのか?!ただし、それらについては、まずは、北部九州での出会いから始まったものであることは言うまでもない（地勢的にも、一番可能性が高い!）?!

③ その最大（第二）の山（謎の塊）は、「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きと関連している?!

ところで、ここで新たな情報（史実?）を加えてみたい！それは、筑後（久留米・八女）地域の「三沼君（→筑紫君？）氏」の事績（最も重要な「大善寺玉垂宮」や「高良大社」等に関わる?）のことである！

この辺りの事情は、これまでの史実解明とは、かなり異なった様相を呈することとはなるが、要は、その最大（第二）の山（謎の塊）は、筑後地方の「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きと関連している?別言すれば、後に重大な結果をもたらす、複雑な?（九州）倭国（筑紫倭国／豊国倭国）の実態（体?）を解明するためには、その「三沼君（→筑紫君？）氏」の動きに、もう少し注目すべきなのではないかということである（そこに、二つの「倭国」の萌芽もある?）?!

しかるに、その「三沼君（→筑紫君？）氏」の存在・動向は、その後の「宗像大社」の隆盛?とも連動しているようであり（宮島正人『「倭」の神々と邪馬台国 志賀島・宗像・八女』海鳥社、2018年）、もし、そうであれば、例の「磐井の乱」（528→517?年）の真実等も、そうした観点から見直す必要が出てくるし、何よりも「（九州）倭国」の実態（体?）が、かなり錯綜したものであったということ、改めて加味していかなければならないということになる?!

言い換えれば、「邪馬台国（連合）」（の消滅／解体?）以降（3世紀末?）の九州（中北部）の状況が、実際にはどのようなものであったのかということであるが、単純に、邪馬台国あるいは倭国九州説といっても、それ自体が、かなり複雑な様相を有していたのであり、改めて、それと、一方の近畿大和説との整合性、というよりは「関係性」を、いかに見出していけばよいのかという、新たな課題を生じさせるものでもあるということである?!

具体的には、そうした大きな解明枠組みは、端的に言えば、4世紀以降?の（九州）倭国が、現在の久留米市辺りを中心とする「筑紫倭国」と豊前地方（福岡県東南部と大分県の北東部）にあった「豊国倭国」の二つ（の倭国?）からなり（関係的には、後者は、前者の分枝国（檐魯国）であった?）、例の「磐井の乱」を境にして、後者が前者を凌駕?して、その後、後者（息長氏や秦氏の一部?）は、何らかの理由・形で、近畿（北陸を含む）へ移動していった?!

そして、残った「（九州）倭国→物部氏（亀鹿火）」の勢力は、新たに「（九州）倭国」を牛耳り、そしてさらに、そこから「上宮王家（→蘇我氏）」も起こり、彼ら（の主力?）も、やがて近畿大和（飛鳥）へ移動していった（→推古朝?それが、いわゆる「飛鳥時代」とされるものである!）?!ここに、改めて、事実としての「二つの倭国（九州と近畿）」が並立するということである?!

ということで、3世紀末?の邪馬台国（連合）の滅亡（解体?）後、（九州）倭国は、筑紫と豊国に分かれて、その豊国倭国（の主力?）が、その後、近畿

へ移動（進出）した?!その移動（進出）が、いわゆる「応神」の時であったのか（多分?「仁徳」に被されている?）、あるいはまた、「継体」の時であったのか、まだまだ結論は出せないが（双方があり得る?）、そのこと自体は、おそらく事実であったろうということである（それが、まさに「倭の五王」の時代でもあった!）?!

また、そうでなければ、他ならぬ「物部氏」や「息長氏」、さらには「秦氏」等の、両地域（北部九州と近畿・北陸）での蛸集・活躍は説明出来ないし、「二つの倭国の並立論」も成り立たない（ただし、これ自体の見解は、私個人のものではあるが、強いて言えば、「兼川説」と「石渡説」の融合?ということになるだろうか?）?!

とにかく、もし、そうであれば、そもそも、何故、そのようになったのか?そして、それは、どのような形で進行していったのか?そこの部分の解明が、是非とも必要となってくるということである?!

なお、ここの部分の解明を精緻に行われたのが、まさに兼川晋氏ということになるわけであるが（「筑紫倭国と豊国倭国の並立と相剋」というような解明枠組みの提示）、その複雑な様相については、そうした枠組みとの照合の中で、改めて整理（解明）されなければならないということにもなる?!

ただし、兼川説自体は、すべてが九州の領域内に留まっている!折角、「豊国倭国」の実態（体?）を解明されているにも拘らず（特に、いわくの「九州年号」の解明!）、近畿大和への広がり、つながりが見えていない（敢えて、そのようにされているのかもしれないが、本当に残念である!）?!

このように、ここでは、「筑紫倭国」と「豊国倭国」の分立（→後者の分離・独立?）が、どのようになされていったのか?ということであるが、その鍵を握っているのが、実は、筑後地方の「三沼君→筑紫君氏?」の動きであるということである?!

だが、そこで問題となるのが、「記紀」が一番暈している「武内宿禰系／葛城諸族（蘇我氏・葛城氏・紀氏・波多氏・巨勢氏・平群氏等）」の存在と、その絡みである?!何故なら、件の「三沼君→筑紫君氏?」の活躍の場所が、一方では、その「武内宿禰系」及び「神功皇后（息長足姫）」の活躍の場所と重なるのである（「大善寺玉垂宮」「高良大社」等）!

しかも、その「葛城諸族」の名前と同じ土地名（の並び）が、近畿大和にも、何故か?あるのである!ということは、それは、そこにいた「諸族」が、ある時に大挙して、近畿大和へ移動（進出）したということにもなる?!

しかも、他方で、その出発地?の近く（現みやま市）には、百済系勢力の存在を示す「こうや（こうら?）の宮」（正式名称は、「磯上いそのかみ物部神社」）があり、そこには、かの有名な、百済からの贈り物「七支刀」と同じものと思われる刀を捧げ持つ「百済武官?」の像があるという（←兼川晋氏）!そうなれば、

そこには、かの「物部氏」の根拠地（出発地？）もあったことになる?!

なお、その実物の「七支刀」は、現在、近畿大和（天理市）の「石上いそのかみ神宮」に奉斎されている！そして、その「七支刀」は、ある時（「崇神」の頃?）、「吉備」（現赤磐市）の「石上布都魂神社いそのかみふつのみたま（物部神社?）」から移動してきたとも言われている？しかも、その「石上布都魂神社」の祭神は、驚くなかれ、「素戔鳴命←布都魂／十柄劍」であるということでもある?!

こうなってくると、この辺りのことは、改めて、ほとんど混沌としてくるのであるが、これも、ある一つの仮説（こちらは、まだ妄想かも?）を立てれば、説明出来ないわけではない?!それは、古代最大の豪族?である「物部氏」（直接的には「あらかい 鹿火」から?）や「蘇我氏（←武内宿禰系）」は、北部九州で興った氏族・勢力であるということである（ただし、後者は、もともとは朝鮮半島から渡来?さらには、シルクロードを伝って、西域から移動してきていた?）?!

そして、おそらく、後者の「蘇我氏」は、ある時期から、その「物部氏」と血縁関係を結んだということであり（そこから「上宮王家」も生まれた?←兼川晋氏）、これらの「諸族」（「尾張氏」も含む?）が、ある時から近畿大和に大挙?移動（進出）し、「記紀」が示す、（多分?6世紀以降の）近畿大和の「大和朝廷→日本国?」を創り上げた?そういうことである?!

なお、ここでは、いわゆる「物部氏」の系統（三つある?）に関わって、「饒速日にぎはやひ系」と「火明ほあかり系」について触れておきたい！まずは、「記紀」は、その物部氏の祖を、双方共に「にぎはやひ」としているが、後の、物部氏の伝承物?とされている『先代旧事くじ本記』（9世紀初頭?）では、「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊あまてるくにてるひこあまのほのあかりくしたまにぎはやひのみこと」とされており、彼?が、すべての「物部氏」の祖とされている?!

しかし、実は、「饒速日」と「火明」は別系で、強いて言えば、前者が「大和物部氏（「可美真手うましまで」系）」、後者が「筑紫物部氏（「天津麻良まら」系）」ということであり、もちろん前者が、通説の「物部氏」であるとされたわけである（ちなみに、「河内物部氏」は、前者の「可美真手うましまで」系の一部であった?）?!

いずれにしても、「記紀」においては、この「物部氏」の近畿・大和への進出が、かの「崇神＝御間城入彦五十瓊殖ミマキイリヒコイニ」の事績として描かれていると考えられるが（第2の「御肇国天皇ハツクニシラススメラミコト」とされている!）、これらは、おそらく、伽耶（多羅?任那?）からの渡来系倭人、すなわち「三沼君氏族」のことであろう?!そう考えると、かなりの謎が氷解する?!

しかし、そうなると、改めて、同じ経緯の（時代や活躍場所が重なる?）「武内宿禰系諸族」との異同が、ここでは問われてくる?!三沼君氏族＝武内宿禰系諸族なのか（否、やはりそれは違う?）?!ただ、三沼君氏族（→「崇神」?）が、この「物部氏」の核であったことは、ほぼ間違いないことではあろう?!

④ 改めて、「応神（天皇）」を、「伽耶・新羅系勢力」と「百済・北方系（扶余系）勢力」の「合体（天皇）」としてしてみると、果たしてどうなるのか?!

そこで、ここでは、改めてであるが、件の「応神（天皇）」を、「伽耶・新羅系勢力」と「百済・北方系（扶余系）勢力」の「合体／融合（天皇）」としてみるとどうなるのか? そうみると、後の「百済系勢力」（持統・藤原政権）と「伽耶・新羅系勢力」（息長氏、そして、秦氏、賀茂（直）氏等?）との関係が、かなりスムーズに了解されるのではないか?!

そうすれば、それ以前までの権勢を失った?、時の「伽耶・新羅系勢力」にとっても、自らの自負（正統性→王権?）が認められることになり、それ相応の着弾地（妥協点?）が見出されることにもなる?! 要は、それ（「記紀」上での合作／融合?）について、当該の氏族・勢力達が、互いの思惑と了解の下で、そのような創作（歴史改竄?）を行っているのではないかということである?!

しかるに、史実は、明らかなように、「百済・北方系（扶余系）→百済王族」の末裔?である「藤原氏」の一人勝ちとなったわけであるが（特に「桓武」以降!）、そのようにすれば、双方共に顔が立つ? ということではなかったかということである?! そして、穿った見方をすれば、「百済系勢力→藤原氏」にとっては、自らの政権のやましき（あくどいやり方で、次々と政敵を亡き者にしてきた!）を払拭させることができる?!

そして、一方の「伽耶・新羅系勢力」にとっては、そのストーリー（合作／融合）を受け入れることによって、自らの過去の栄光や実績（→実益?）を担保することができる?! まさに、そういうことではなかったかということである?! そして、そのストーリー（合作／融合）の起（基）点が、他ならぬ「応神」と、彼を取巻く「諸人物」の創出と関係づくり（捏造・歪曲）であったということである?!

尤も、そうしたストーリーづくりは、まったくの嘘や出鱈目では、もちろんダメであり（すぐにバレるし、信用をなくす?）、一応の史実に基づくものでなければいけなかった! だから、そこで最も意を注がれたのが、まさしく「万世一系」の皇統譜づくりでもあったわけである（それが、由緒ある国／政権の証しでもあるからである!）! もちろん、そこには、モデル（あるいはダミー?）となった、実在の人物達がいたわけでもある?!

ただし、その実在の人物達には、多様な実態（実体?）があり（土地々によって違って!）、伝わっている「伝承」や「系図・名前」等が違って!（それだけ、関係の氏族・勢力、人物達が各地に動いていたということであり、自らの血統、実績?に自負を持っていたということでもある? 地名移植等も含めて!）?! したがって、そのような、言わば多様な（その意味で頼りない?）人物群や事績等の情報を下に、それぞれの登場人物（そして、「神」?）をキャスティング（同

定配置)させていったわけである?!

そこで、改めて、その中心となる「応神」であるが、そのモデル(実際上の人物)は、どこの、誰であったのか?!私は、既述もしたように、今のところ、それは、双方ともに「百済系の王族」ではあるが、二人の人物が有力な候補なのではないかと受け止めている!

すなわち、一人が「滕とう→藤大臣?」(百済残国兄王/本家?沸流系王族)という人物であり、もう一人が「昆支こんき」(百済支流仇台系王族)という人物である(ちなみに、前者が兼川説、後者が石渡説)!前者の「滕とう→藤大臣?」は、高句麗による「第一次百済滅亡」(396年)の時の、本家?(沸流系余氏)の「百済残国」の王とされる人物であるが、その滅亡前に本国を逃れて(捨てて?)、北部九州(「貴(基肆/木?)国」)に渡ってきていた?!

なお、彼は、「武内宿禰」(ひょっとしたら?本人?)や「神功皇后(息長帯姫)」と関係があるとされ、近くの「大善寺(玉垂宮)」や「高良大社」の祭神と目される人物でもある(→「高良大明神」?ただし、これについては、当地の「三沼君→筑紫君氏?」との関係も考えなければならない?)?!

後者の「昆支こんき(倭王「旨」?)」は、例の「倭の五王(興?)」の時(「記紀」によれば、「雄略期」!461年?)に、弟の「軍君こにきし」と一緒に、倭国へ人質(入り婿?)として送られてきた「百済王族」とされるが(実は、弟の「軍君→男弟王」が「継体」と考えられる?!)、こちらは、本家?分枝の「仇台系余(←牟)氏」の王族であるとされる(「応神」の諱いみな「ホムタ(品/誉田)ワケ」の「ホムタ」が、「昆支→ホムチ→ホムタ」に通じるという指摘もある?)!

余談だが、ここで「人質」と言っても、百済の「檀魯たんろ国家(新たに開かれた国で、そこに王族が送りこまれる!）」においては、親族は、みな「王位継承権」があり、その一つとなった?「(九州)倭国」も、その権利(しかも本家?としての)を有していた(→それが、かの有名な、「倭の五王」最後の「武」による、宋に対しての、「百済」を含んだ「7か国の軍事統帥権(軍号)」の主張となった?)?!要するに、単なる「はったり(誇張?)」ではなかったということである?!

ちなみに、石渡説によれば、「応神」と「継体」は兄弟(通説は5世孫!）、「欽明」は「応神」の子とされ、「継体」の子・「安閑」と「宣化」とは従兄弟関係ということになる?!しかし、通説のように、「欽明」が「継体」の子であれば、「安閑」と「宣化」とは兄弟(母親は違う!)ということになる(いずれにしても、「欽明朝」と「安閑・宣化朝」は並立していたとは言える?)?!

だが、問題は、このいずれの場合も、「応神」は「百済系(王族)」となるので、一方の「新羅系」の要素(血?)はない?!そうなると、ある意味必然的に?、母親の「神功皇后(息長足姫)」から(「仲哀天皇」との父子関係もあるが?)、その新羅系の要素(血?)をもらっていることになる?!本当に、そういうことで

あったのかということであるが、「神功皇后（息長足姫）」という仮想の人物（偉大な女傑？）が創出され、それを介して、まさに両者（「百濟系」と「新羅系」）が合体／融合されたということになれば、その謎？は、一応は解決される?!

何故なら、彼女は、一方の「新羅系」の始祖？「天日矛」の末裔ということになっているからである！ただし、「神功皇后（息長足姫）」は、他方では、3世紀半ば頃の「卑弥呼」または「台与」を連想させるものともなっているので、時代設定的には、かなりの矛盾がある（「天日矛」の来日は4世紀半ば頃?）?!

であれば、その可能性は、「息長氏」、それ自体にあることになる?!つまり、豊前（香春岳周辺→「秦王国」?）にいた「息長氏」（多分「秦氏」も!）と「九州（筑紫）倭国」に渡来してきた「藤→藤大臣→応神のモデル?」が結託（婚姻?）して、一つの大きな勢力をつくったということである?!

ちなみに、「伽耶・新羅系倭人」の信仰対象は、まさに「太陽」であり、その信仰形態は、いわゆる「ヒコ／ヒメ制（太陽感精?）」であった?!すなわち、「太陽」が「男性」であり、その「精?」を受けるのが「女性」ということである?!それはまた、「太陽」と「山（神奈備山）」の関係となる?!こうした「ヒコ／ヒメ制」の存在は、全国各地にある「夫婦（もしくは兄／妹、その逆も!）神」を見れば、一目瞭然である?!

したがって、また、「山（の神）」は、それ故に「女性」と考えられ（だから、逆に「女人禁制」ともなった?）、それと一体化した（憑依する）、かの「巫女（斎宮?）」と呼ばれる「女性」は、それを顕現させる存在であったわけである（通説の、女性としての「天照大神」が、最初は「大日靈貴オオヒルメノムチ（「偉大な巫女!）」と呼ばれたのはそのためである?）?!

なお、その太陽は、ある時は「龍神」となり、恵みの雨をもたらすものでもあった（ただし、これは、本来は「南方系」か?）?例の「伊勢神宮」の大神（「大物主神?」）とその「斎宮」との逸話（その大神は、まさに「龍=蛇」であったという話!）があるが、そうした関係は、後の「伊弉諾／伊弉冉」（アダムとイブ?）のパロディ?を持ち込むまでもなく、伽耶・新羅系の渡来系倭人（太陽信仰族）のものであることは明らかである（当地にも、同じような逸話がある!）?!

ちなみに、最初の「伽耶・新羅系倭人」の渡来地である「伊都国」には、「高祖たかす山」というものがあり、その麓には「高祖神社」（祭神：彦火火出見ひこほほでみ／玉依たまより比売／息長足姫。ただし、本来は「高磯たかそ比売」→「比売許曾ひめこそ」だった?）もある！また、そこには、例の「天日矛（太陽神?）」の苗裔と称した「怡土県主／五十迹手いとて」がいた（新羅遠征の神功皇后を招き入れたとも?）!しかも、ここは、例の「倭国大乱」の影響を受けていないともされる（実は、そこの勢力が、「倭国大乱」の首謀者であった?）?!だが、その「倭国大乱」は、「吉備」が出发点であった?!ここを、どう処理するかではある?!

⑤「太宰府」は、「(九州)倭国」の首府であった?!「倭の五王」時代の真実?!

一方、九州勢力の近畿移動(何波にも亘る?)は、北部九州に残っていた?倭国勢力(本家?)が、その後、どのような展開となっていたのかという問いを、改めて生み出す?!何故なら、彼らのすべてが、近畿大和に移動したわけではないし、以下に示すように、そこには、厳然と「主権国家?」(→600年の、アメタラシヒコ/天足彦の「大倭=倭^{たい}?国」)が存在していたのである?!

そして、それが、「三沼君→筑紫君氏?」→「磐井氏」→「阿每(天)氏?」の事績とつながっているということであり、とりわけ、その国の首府となっていた「太宰府」(470年頃、倭王「武」によって造られていた?)の存在が、改めてクローズアップされてくるのである!だから、そのことは、「磐井の乱」の捉え直しや「高良大社」等の意味を再考させるものでもあるのである?!

しかるに、『宋書』(倭(倭)国伝)によれば、倭王「武」は、478年に中国宋朝に対して、「自ら開府儀同三司を仮し」とする上表文を送り(「三司」とは、中国古代の官名で、太宰^{ださい}・太傅^{だいぶ}・太保^{だいほ}の「三公」のこと)、「中国に倣^ならって自ら都を開き、三公も設置した」と述べているのである!

これは、まさしく彼が、一つの国(中国の「冊封国家」)であることを主張していることになるわけであるが、しかし、そのこと自体は、「記紀」にはまったく触れられていない(しかも、「磐井の乱」の位置づけからも分かるように、九州の当地は、まだまだ「大和朝廷」のものにはなっていない!)!

であれば、太宰府の「都督府跡」「観世音寺」等に示されている、残った?「(筑紫)倭国」の事績は、どのように理解されるのか?

さらに、通説では、663年の「白村江の戦い」の敗戦による、唐・新羅の本土進攻に備えるため、「中大兄皇子」(後の「天智天皇」)の命によって、太宰府近辺の、「水城^{みずき}」「大野城^{おおのじょう}」「基肄城^{きいじょう}」といった城(朝鮮式山城)が、ほぼ同時期に建造されたとされているが、その後の発掘調査によって、その通説は、変更を余儀なくされそうでもあるということである?!

と言うのも、それまでの定説では、「太宰府」(「都督府跡」)の、現在地上に見える礎石は創建時のもので、上層の建物は、941年の「藤原純友の乱」によって炎上し、その後再建されることはなく、事実上終息したとされるらしいが、その礎石の下に、同じような配置の礎石が確認され、さらに、その下層に掘立柱建物の柱穴があり、遺構は、大別して三期からなるらしいのである?!

ただし、それらについては、いろいろ帳尻が合わされている?ようではある?!第一期の掘立柱建物は、663年の「白村江の戦い」の敗戦後に、水城・大野城・基肄城と同時期に建造され、第二期の地中の礎石建物は、「大宝律令」施行の702年頃に建造され、941年の藤原純友の乱により焼失した。現在地上に見える礎石は、その後に再建された建物のものであるとか?という具合に!

一緒に出土した瓦や土器片が、それを裏付けるらしいが、10世紀半ば以降の太宰府再建ということであれば、その国家的大事業が記録に残らないはずはない？第二期の建物にしても、大宝律令施行の702年頃の建造だとすれば、律令制のシンボルとして記録も必ず残されるはずであるとされるが、その記録も、一切存在しないということである！

だが、それよりも何よりも、新たに注目されるのは、その周辺に、そこが「一国の首府」であったことを示す（「宋」の「冊封国」としての？）「地名」や「建物（跡）」群があることである？！それが、上記の「太傅府^{だいぶふ}（天子の養育に携わる官府）」と「太保府^{だいほふ}（天子の徳を保ち安んずる官府）」というものであり、これと「太宰府」を合わせれば、そこが、ある国の「首府」であったことは揺るぎない事実であるとされるのである？！

その両者であるが、前者（使用漢字は違うが、読みは一緒！）は、太宰府の北東約14kmの地（飯塚市大分^{だいぶ}）にあつて、そこには、現在「大分^{だいぶ}八幡宮」（祭神は応神天皇・神功皇后・玉依姫命）があるという（「宇佐八幡宮」の社伝『八幡宇佐宮御託宣集』によれば、「大分宮は我本宮なり」とされ、また、「宇佐八幡」「石清水八幡」とともに、日本三大八幡宮の一つである「箱崎八幡宮」は、923年（759年説あり？）に、大分宮から箱崎の地へ遷座されたものでもあるらしい！）！

また、その大分八幡宮の東（約1km程の所）には、「大分^{だいぶ}廃寺塔跡」と言われる古代寺院跡もあるらしい！

なお、近くには（嘉穂郡桂川町寿命）、「王塚古墳」もある（6世紀の前方後円墳で、石室の大部分は地元産の花崗岩等が使われているが、石屋形や石枕・灯明台は阿蘇の溶岩製。このことは、この墓の主が、単なるこの地の豪族でないことを物語る。石室内は壁面全体に色彩豊かな文様が描かれ、石枕・灯明台を設置するなど、その構造にも技巧を凝らしている。「装飾古墳」としての豪華さは、他に例をみない超一級のものであり、おそらくこれは筑紫王家の墓であったろうとされるものである？）！

後者（使用漢字も、読みも、少し違うが？）は、小都市大保^{おおほ}という所で（太宰府の南、約14km）、「御勢大霊石^{みせたいれいせき}神社」があり（旧石器時代から8世紀後半に掛けての複合遺跡で、建物跡群は筑後国御原郡の郡役所跡であろうと推定されているが、規模が異常に大きいとされる！）、社伝によれば、神功皇后が、熊襲征伐のおり、この地で死んだ仲哀天皇（第14代）の代わりに、御魂代の石を軍船に積み鎧兜を着せ、三韓遠征を行い、帰国後に、その石を、殯葬^{ひんそう}（かりもがり）のこの地に奉ったということである？！

したがって、この神社は、「仲哀天皇」の「殯葬伝説地」、すなわち「殯宮^{ひんきゅう}」であるということであるが、その由緒は、後に神后皇后伝説として創作されたものであろうとはされる？！とは言え、その創作の背景にあるのは、この地が、まさに「太保府^{だいほふ}」の地であったということではなかったか（近

くには、「井上麿寺」もあるという!)?!

いずれにしても、このように、この一帯に、「太宰府」(+観世音寺)、「太傅府」(+「大分麿寺」)、「太保府」(+「井上麿寺」)があったということであれば、その一帯が、ある時期の「国の首府」であった証拠であり、それが、「(筑紫)倭国」と呼ばれるものであったことは、おそらく間違いないのではないか?!

ちなみに、太宰府の南約 1.5 km には、「小郡おごおり官衙かんが遺跡」といわれる掘立柱建築物跡、さらには、太宰府の北西約 16 km (福岡市中央区城内)には、「鴻臚館こうろかん→筑紫館つくしのむろつみ」もあるわけである!前者の「官衙かんが」とは、役所の意味であるが、7世紀中頃から8世紀後半までの3期と、それ以前のもの(1~2期)を併せた複合遺跡であるらしいが、規模が異常に大きく、単なる地方役所跡とは思われないらしい!

また、後者は、外国使節を迎える客館、すなわち迎賓館であるが、一国の首府の機能としては欠かせないとされるものである。しかも、近年の発掘調査で、そこと大宰府とが、幅 2 m 深さ 1 m の側溝が両側に完備された、幅員 10 m の一直線の道路で結ばれていたことも確認されているらしい!アジア大陸につながる国際道路とも言えるが、遅くとも 700 年代末には、既に廢道になっていたということである!

ということで、「太宰府」は、少なくとも 701 年(大宝律令制定→実質的な「九州倭国(本家?)」の消滅=「近畿大和(倭)→日本国の成立」)までは、倭国全体の「首府」であったということであるが、「記紀」編纂側(持統・藤原体制)は、そこにルーツはあったものの(かろうじて、その皇統を受け継いでいる?)、そのプロセスが、極めてあくどいやり方であったために、そのことを、まともには記せなかった?

否、絶対に、それは、隠さなければならない事実であった?!だから、その後継勢力ではあったものの、逆に、「邪馬台国(卑弥呼・台与)」についても、直接示すことは出来なかった?!そしてまた、それに関わる(ある意味、正統の?)後継勢力のことについては、暈したり、はぐらかしたり、捏造したりして、その存在と活躍を闇に葬ってしまった?そういうことかと思われる?!そしてまた、そのように受止めれば、「記紀」等の矛盾は、ほとんどなくなる?!

とは言え、その矛盾の内実を、まさに整合的に説明出来ないのが、現時点の私なのでもあるが、その鍵を握っているのが、繰り返しになるが、件の「三沼君(→筑紫君?)氏」の存在(その動きと関連氏族の関係)であることは、ほぼ間違いなく、今後は、その具体的な実相を、いかに解明するかであることは言うまでもない?!とりわけ、そこでは、「三沼君(→筑紫君?)氏」と「神功皇后・武内宿禰系諸族」の関係の解明が、大きなポイントであることは、これもまた、言うまでもないことである?!

⑥ 「物部氏」「葛城諸族（蘇我氏）」（筑紫倭国？）、そして、一方の「息長氏」「秦氏」（豊国倭国？）が、第三の山（謎の塊）をつくった?!

さて、そうすると、改めて、その「（筑紫）倭国（大倭→倭たい国?）」は、一体どのような氏族・勢力が関わり、再編統治（建国?）していたのかということになるが、例の倭王「武」が、それに関わっていたとなると（正確には、彼の先祖達が成し遂げていた?←宋への「上表文」!）、当然、それは、いわゆる「倭の五王」の勢力ということになる（4世紀以降の、いわゆる「応神」勢力?）?!

そして、その「倭の五王」の勢力は、基本的には百済系（王族?）と考えられるので、彼らが、そこから版図を広げ、北部九州と近畿大和に「二つの倭国（三つか?→河内倭国?）」を創り出し、「記紀」は、それを、九州での「神功皇后+武内宿禰」の動きと、その後の「応神（→河内王朝）」勢力の、近畿への移動として描いていることになる?!

しかも、それらの事績に、「三沼君氏→筑紫君氏?」（それ自体か?）、そして、「息長氏」や「秦氏」（豊国倭国?）が絡んでいたことは間違いのないことである?!

何故なら、その後の「継体」王権（→後の「持統・藤原体制」につながる!）は、そこから生まれているからである?!

したがって、まさにそこに、「第三の山（謎の塊）」が形成されているということでもある?!

そこで、もし、そうであれば、「記紀」が示す史実?、そしてまた、それを元にしたこれまでの通説を、新たな真相解明に向けて、いかに超克していくかということになるが、これらの仮説（+妄想?）の展開に当たっては、九州（筑紫+豊国）倭国の「物部氏」、そして、そこから派生した?「蘇我氏（上宮王家）」が、7世紀前後?に、近畿大和（飛鳥地方）に移動し、後に「日本（国）」と呼ばれる、もう一つの「倭国」（近畿倭国）を樹立させたということ、いかに解明していくのかということにもなる?!

そして、その中で注目されるのが、一方で、それに協力（主導?）したのが、同じく九州にいた「息長氏」や「秦氏」ではなかったかということである?!

すなわち、「息長氏」や「秦氏」（の主力?）は、いわゆる「磐井の乱」を境にして（否、それ以前に移動していたかもしれない?）、近畿方面に移動（進出）していた（前者が「琵琶湖東岸」、後者が「山城方面」を根拠地として?）?!

ちなみに、「秦氏」は、「息長氏」と行動を共にしながらも、特に「蘇我氏（上宮王家）」の大和移動（進出）に助力し、その後の「倭国→日本国」の成立に大いに寄与した?!

そして、その原動力が、彼らのもつ経済力とネットワーク力であったことは、彼らの拠点、後に「太秦^{うづまさ}」と名付けられたことから、容易に推察されることであろう（その逸話は、つとに有名である!）?!

しかるに、これらに関わっては、例えば、豊前の「香春神社」（香春岳周辺）と「宇佐神宮」、そして、「宇佐神宮」と「宗像大社」の関係が、大きくクロー

ズアップされてくる?!そして、それらは、それぞれ「息長氏」(新羅系の製銅・製鉄集団)、「宇佐氏」(事実上は、百済を経由した?「秦氏」?)、「宗像氏」(事実上は、伽耶ないし百済から渡来した「三沼君氏」?)の拠点であったわけであるが、その三社の関係は、まことに緊密であった?!

すなわち、それらの相互の関係性から(例えば「香春神社」と「宇佐神宮」の間では、ある祭祀の際に、前者で鑄造された「鏡」が後者に奉納されるとか、「宇佐神宮」と「宗像大社」の関係では、前者の祭神(の主神?)が、「宗像氏」が奉斎する「三女神←比売大神」とされているとかである!)、「宇佐」を根拠地(前線基地?)とした(九州→事実上は「豊国」)倭国勢力の、「瀬戸内海航路」の掌握、そして、近畿・大和への進出といった構図が、くっきりと浮かび上がってくるのでもある?!

だが、そうなると、他方での問題は、「(筑紫)倭国」と「出雲(王国?)」の関係であり、いわゆる「日本海航路」でつながっていた勢力・諸族と「瀬戸内海航路」で、新たにつながった?勢力・諸族との反目・抗争(集散離合)のプロセス(内実)がいかにあっただかということになってくる?!多分それは、主として「鉄」の所有・分配に関わる動きであったろうが、実は、その最初の大きな画期(要因)となったのが、「魏志倭人伝」にある「倭国大乱」であったろうことは、言うまでもない(すなわち、そこでは、それまでの勢力関係を、ある意味根底から覆す、諸族・勢力のシャッフル化が起こった?)?!

しかも、それは、九州での「邪馬台国」の出現に関わるだけではなく(むしろ、それは、その「大乱」の、北部九州での様相(結果)であり、事実、それらを示す「東からの勢力→前方後方墳勢力」の九州進攻の痕跡もある→例の「吉野ヶ里遺跡」!)、西日本、否、東日本をも巻き込んだ大変な動乱であったわけである(これについては、藤井耕一郎氏の、吉備から出発した「手焙形土器／前方後方墳(火?／太陽・龍王信仰勢力)」の動きの解明が大いに参考となる!)?!

とは言え、その「倭国大乱」の初源地(出発地)は、近畿大和の「纏向遺跡」に、その影響痕跡を大いに残す「吉備」であり(鉄の所有・分配で一番不利を被っていた?)、その勢力が、まずは「出雲」、そして「播磨」「河内」「丹波」「越」「東海」「関東」へと進攻?し、一方で、ある一群(後発か?)は、「河内」から「大和」へと移動し、彼らは、全体としては、その後、「東海」、「関東」へとも動いていった(→「氷川神社」あるいは「鹿島神宮」「香取神宮」等?)?!

さらに、その一部(「神八井耳」勢力→「多氏」)は、踵を返すように、西の九州方面にまで進攻していった!そして、彼らは、「火(肥)君」「阿蘇君」「大分君」等となった(ひょっとしたら、「筑紫君氏」も?)?!そうしたプロセスが、後の「大和朝廷」の成立に大きく関わっていた(それそのもの?)ということであり、「記紀」は、その内実を、かの「神話」という形で描写(示唆?)し

ているのではないかということでもあるが、実は、そうした、後に整えられた「神話（ストーリー）」の原形（出所？）は、おそらく「息長氏」や「秦氏」（そして、「加茂（直）氏」も？）のものであった（彼らが、最初に、「記紀」の原形のようなものを創り上げていた？）？！

しかるに、「記紀」（の編纂者達）は、その原形（元話）を、自らの思惑や利害関係によって変形・加工（換骨奪胎？）し、時の最高権勢者であった「持統・藤原不比等」にとって都合のよいものにした？！だからこそ、改めて、そのプロセス（内実）に関わると思われる「息長氏」、「秦氏」（「加茂（直）氏」や「三沼君氏→筑紫君氏？」も！）の動勢が気になってくるのである？！

だが、それにしても、筑後地方の「三沼君氏→筑紫君氏？」と、ある時期同じ圏域にいたと思われる「葛城諸族→武内宿禰系諸族」の関係が、一方で問われてくるわけでもある！しかも、それは、当然、「邪馬台国（連合）」のその後ということにもなるが、「筑紫（筑後）」と「筑前」の関係ということにもなる（多分？筑後地方が、当初の「筑紫」の元となっている？←宮島正人氏）？！さらにまた、そこに、以前にも述べたように、「伊都国（怡土国）」も絡まってくるのである（そこには、「天日矛」や、その後裔を名乗る「五十迹手いとで」→「怡土県主いとのあがたぬし」の祖。筑紫に行幸した「仲哀天皇」と「神功皇后」を出迎え、「伊蘇志いそし」の名をあたえられた。それがなまって、「伊覩（→伊都）」になったとされる？）？！

そして、そこには、「加也^{かや}山」（山頂には、神武天皇を祭る「可也山神社」あり）、そして、「高祖山^{たかすやま}」（古代の怡土城跡）もある！改めて、そこに、「伽耶・新羅系勢力」の存在（進出）が見て取れるのである？！彼らは、おそらく「息長氏→神功皇后」や「武内宿禰系種族」とオーバーラップされていると思われるのでもあるが、要は、「伊都（イト→イソ/イセ？）」は、かなりの鍵（謎？）を有しているということでもある？！

そしてさらに、そこは、「素戔嗚命（→天日矛？）」や、その子とされる「五十猛^{いたける}神」の上陸地とも考えられるのである？！しかも、そこは、「朱丹（辰砂）」の生産地（集積地？）でもあり、そしてまた、後の「三種の神器」の原形と考えられる、「鏡」「劍」「玉（勾玉）」のセット的出土もあり、ひょっとしたら、ヤマト王権の源郷とも考えられるのである？！

彼らが、具体的に、どこから渡来してきたのかは、まだまだ判然とはしないが（半島から直接か？それとも、出雲を経由してからか？いずれにしても、元々は半島からの渡来系であることは、彼らの、渡来逸話からも明らかである？）、そこにある大きな史実？が、実は、「第二の大きな山（謎の塊）」、そしてまた、「第三の大きな山（謎の塊）」を成していることは、改めて言うまでもない？！それらが形成される前までの「弥生期」の状況、そして、大陸や朝鮮半島との地理的関係を踏まえれば、そのことが重要な史実？として確認されるのである？！

⑦「葛城氏（諸族）」と「息長氏（諸族）」の近畿移動、しかもセットで？では、いつ頃、どのように？

さらに、もう一つ、ここでは新しい情報（事実？）となるが（あるネット情報による！）、件の「伊都国」の南の「背振山系（南麓）」に蝟集していた？「葛城氏（諸族）」のことが、改めてクローズアップされてくる！そしてまた、その「諸族」と、例の「貴（木／基肆）国」（新羅系？）との関係（つながり）も気になってくるのである！

それは、どういうことかということ、端的に、ある時期に、「葛城／息長系諸族」が、「伊都国」の南の、佐賀県の背振山系（南麓）に居たということであり、それが、『日本書紀』に記されている、「百済の王、東の方に日本の貴国有ことを聞て、臣等遣て其貴国に朝でしむ」の「貴国」であれば、ある意味とんでもない史実となるからである（従来は、「貴国」は、「日本国」の尊称と解され、別の国の存在としての認識もないか、すこぶる曖昧にされているのでもある？）？！

すなわち、その旧背振村には、「桂木」という場所があり、そこに「一言主命神社」、さらには、「長江」という地名もあり、そうなれば、そこに、例の「武内宿禰」の子の一人「葛城長江ながえ襲津そつ彦」（「葛城氏」の直祖？）が思い起こされるのである？！そしてまた、そこには、新羅系の「息長氏」につながる？「伊福いふく（伊吹？）」という地名もあるということである！しかも、その地には、「踏鞴たたら製鉄」の痕跡もあるということである？！

そして、さらにまた、驚くなかれ、それらに加えて、その二つの氏族（葛城氏／息長氏）は、その佐賀県の脊振山系から福岡県うきは市の「耳納みのう山系」へと移動しているように見えるということでもある？！例えば、「巨勢こせ川」という名の川が佐賀市を流れているが、同じ名、同じ表記の「巨勢川」が、うきは市から久留米市を流れて、筑後川に注いでいるということである！

また、通説では、「神功皇后」の一族（息長氏）は、近江（琵琶湖東岸）にいたとされるわけであるが（事実、敏達天皇妃の「息長広姫」の陵墓などは、滋賀県長浜市の「姉川」沿いにある。ただ、それは、まだ後の時代の事であるが？）、佐賀県神埼市（佐賀市の東隣で、「吉野ヶ里遺跡」に隣接する）と福岡県うきは市には、近江にある「姉川（地区）」と「妹川（地区）」という河川名、地名が存在しているということでもある（ただし、「姉川」地名は、肥後の「菊池氏」の分流が肥前へ展開し、現地の姉川地名を称したものともされるらしいが？）？！

ちなみに、後者のうきは市には「妹川地区」があり、「伊福」という鍛冶屋も沢山住んでいたということである（彼らが、滋賀県の「伊吹（伊福の置換え？）山」と関係があることは明らかである？）？！

しかるに、北部九州と近畿に、いわゆる「二つの倭国」が併存していたということを、我が国古代史解明の核としている私であるが、それは、まったく別々

の氏族・勢力がなしていたものではなく、同族ないしは関係の氏族・勢力による、言わば「相互越境的な」関係の中で成立していたということが、その骨子であるわけであるので、上記の情報（史実？）は、その思いに、さらに拍車をかけるわけである！

改めて、彼らは、大きく分けると、時代順的には、「江南系」「伽耶・新羅系」、そして「百済系」の諸族であり（ただし、彼らは、言うなれば「渡来系倭人」と総称できる？）、その内部関係の中で、集散離合を繰り返していたということであるが、「葛城／息長系諸族」も、その中の一つであるわけである？！

そして、その後？、香春岳周辺に移動していた「息長諸族」（→「英彦山」（秦王国？）→新羅系！）と、上記の「葛城諸族」が、ある時期にタッグを組んだ？そこに、同じく「新羅系（辰／秦韓）？」の「秦氏」も加わった？そのように理解されるのである？！

こうした中で、「物部氏」や「秦氏」の、北部九州と近畿双方の地域における蝟集的存在の事実（前者は北九州比企郡部と河内地方、後者は豊前地方と播磨／山城・太秦地区等）は、現在の地名等にも残されている？！したがって、それらの氏族・勢力が、どのように行き来（移動・進出）していたのかという事実の解明が、当然必要となってくるということである？！

そして、他の関係氏族・勢力についても、なかなかその実相が掴めないものであったが、上記のように、「葛城氏」（大和葛城山麓）や「息長氏」（近江琵琶湖東岸地域）については、その移動（進出？）の状況が、新たに分かるということである（その逆の動きの可能性もあるが、常識的にみて、それはあり得ない？）？！しかも、その両氏は、ある意味セットで移動（進出？）したのではないかということでもある？！

一方、これについては、さらなる情報となるが、佐賀県の脊振山系には、「野波のなみ神社」（旧三瀬村）という神社があり、その祭神が「息長宿禰」と「葛城高たかぬか額かぬか姫」とされ、その神社の「下の宮」が、かの「神功皇后（息長帯姫）」を祭神としているということである（神功皇后は、両者の娘！）！まさに、そこにも、「息長氏」と「葛城氏」のセット的存在が見て取れるのでもある！

しかも、その息長一族は、現久留米市田主丸町一帯にも拠点を持っていたようであり、さらにまた、その神功皇后（息長足姫）の母親とされる「葛城高たかぬか額かぬか比売命」を祀る「一言主神社」が、旧三瀬村の東隣の旧脊振村（現佐賀県神埼市）の「鹿路ろくろ」という集落にもあるということなのである（バス停名は「桂木」）。そして、実は、この地は、昔は「高良こうら？」と呼ばれていたということでもある？！

そこで、その「高良」と言えば、例の、久留米市の「高良大社」ということになるが、これに対応すると思われる「高良神社」（祭神：武内宿禰）が、こ

れまた、驚くなかれ、滋賀県の彦根市にもあるということである！また、その滋賀県には、高良の置換えと思われる「甲良こうら（町）」もあるということである！

さらにまた、そこには、「甲良神社」（「天武」の後の「尼子姫／宗像徳善の娘」の勧請という。祭神は「武内宿禰」。相殿に「宗像三女神」がいる！）がある上に、隣の「豊郷町」には、「安自岐あじき神社」（祭神：「味鋤高彦根あじすきたかひこね」→「安自岐氏」←高貴な百済系渡来人 cf. 王仁氏）を持つ「安食あじき」という地区もあるそうである（ということは、そこに、「鴨族」が関わっていたということでもある?!）！

つまり、「高良」と「甲良」が対応しているだけならば、もちろんそれでいいのであるが、この甲良町の隣の「安食あじき」の「阿自岐」まで揃っていると、そこは、どう考えても、「高良大社」のある、久留米高良山の麓に居た「阿自岐の一族」が移動した痕跡地名であることは、疑いようのない事実であるということである?!

しかも、かの「太宰府」にも「阿志岐」という地名があり、古代、有明海が久留米市の北側まで大きく入っていた 1500 年前頃までは、高良大社の南麓までが、「阿志岐」であったと言われているらしいのである?!

他にも、同じような地名対応もあるらしいが（糸島市前原と米原（旧脊振村）、そして、滋賀県米原市）、このことは、他ならぬ「息長氏」が、当該の地に居た？または、そこから移動していった勢力であることを示している（他にも、播磨・吉備等にも、「息長」を名に持つ関係者がいたようである？）?!

ちなみに、その後の、「息長氏」の根拠地（琵琶湖東岸）は、美濃・越への交通の要地であり、「天野川」河口にある「朝妻津」により、大津・琵琶湖北岸の「塩津」とも繋がっている。また、そこには「息長古墳群」があり、相当の力をもった豪族であったことは間違いない！なお、「息長」の名義発祥の由来は、上古から持つ製鉄・鍛冶に関する技術から生じたとみられる?!

しかるに、その「息長氏」は、「記紀」によると、「応神天皇」の皇子「若野毛二俣わかぬけふたまた王」の子・「意富富杼おおほど王」を祖とするとされているが、それと関連する「山津照やまつてる神社」の伝によれば、彼らは、「国常立くにのたち命」を祖神としており、皇室との関わりを語る説話も多いようである?!だからこそ、「息長氏」は、天武の時代の「八色姓やくさのかばね制」で、最高位の「真人まひと姓」が与えられたのでもある（同族の「三国公→三国真人」／「坂田公→坂田真人」／「酒人さかひと公→酒人真人」もである!）?!

以上のように、「葛城氏（諸族）」と「息長氏（諸族）」の関係は、そのセット的移動を含めて、重要な関係にあり、そしてまた、それが、件の「応神天皇」の存在と活躍に直結しているのでもある?!

⑧ 次が、第一の山（謎の塊）？「邪馬台国（連合）」前後の「倭国（種）」の実態（実体？）?!「安曇族」の全国展開（海洋交易）と「(倭) 奴国」のその後?!

次に、ここでは、改めて、第一の山（謎の塊）？「邪馬台国（連合）」時代の「倭国（種）」の実態（実体？）について、押さえておきたい。すなわち、そのことは、ある意味？「倭国大乱（180年頃）」前後の実相ということになっていくわけであるが、それが、全国各地に大変動をもたらし、その後の倭国（→日本国）の推移の大いなる下地をつくったことは、間違いないからである（その「倭国大乱」は、北部九州だけでなく、西日本、そして東日本へも及んでいた?!）?!

要は、そういう中で、「吉備」からの「手焙形土器（前方後方墳）勢力→ワニ族／多氏？」の東西移動（環濠集落勢力「安曇族？」／「奴国」勢力への攻撃?）、そして、そこから、次の？「前方後円墳勢力（物部族?）」が出てきたということであるが、そうした動きは、件の「倭国大乱」の一環（その結果の一つ?）として繰り広げられたもので、そのような動き（大変動）が、具体的には、どのようなものであったのかということである！

そして、それらが、おそらく、「素戔嗚命の出雲降臨（進出）」、「大国主命（出雲）の国づくり→譲り」、「天孫降臨」、そして、「神武東征」という、いわゆる「記紀神話」の元ネタとなっているのではないかということである?!

ちなみに、ここでは、少し話は飛ぶ?（時代的には戻る!）が、件の「邪馬台国（連合）」以前の北部九州では、「(倭) 奴国」が、「倭人社会（国家?）」の中心であったことは明らかである（漢委（倭）奴国→AD57年に、後漢から「金印」をもらった!ただし、国名の解釈の違いがいくつかあるようであるが?）!

しかるに、その「委（倭）奴国」は、いわゆる「江南系（呉越）」の国であった（『後漢書』等から、そう判断される?）!そして、その王都?は、おそらく最初が室見川流域の「吉武高木遺跡」（「早良王国」）、次には春日丘陵の「須玖岡本遺跡」辺りにあったことは、ほぼ間違いないであろう（ただし、その双方は、違う部族集団であったかもしれない?）?!

そこで、改めて、その「委（倭）奴国」を含め、まさに「邪馬台国（連合）」時代の「倭国（種）」の実態（実体?）は、果たしてどうなっていたのかということであるが、当然、それは、いわゆる「海神（綿津見）族」の頭領?「安曇族」の全国展開（海洋交易）と、そこにおける「委（倭）奴国」のその後ということになる?!

とにかく、彼らは、海洋交易民（海人族）であったことは事実であり、その海洋交易の海の前線基地が、「志賀島」（金印発見地／「志賀海神社」）であったことも、これもまた事実であろう?!そこで、ここで注目されるのが、その志賀島の「海神わたつみ／綿津見神」のことである!すなわち、その「海神／綿津見神」とは「安曇あずみ族（氏）」の奉斎する神であり、その「安曇族（氏）」が、

全国各地（東北地方まで？）に、「あずみ（あつみ）／あど」等の名前を残しているのであるが（「伊勢湾沿岸」、「琵琶湖西岸」、そして、「信濃（安曇野地方）」が有名である！また、「しが（しか）」という名前も、「近江」、そして「信濃」に残している！）、これらが、どのような経緯を有しているのかである？！

例えば、それは、単なる「安曇族（氏）」の全国展開（海洋交易）を示すものであるのか？それとも、あるきっかけ（争い？利害衝突？）で、他の地域への積極的な移動（移住、拡散？）を余儀なくされたものであるのかということである（しかも、このようなことは、同じ海洋交易民？の「鴨族（氏）」についても言える？→全国各地に、「鴨（賀茂／加茂）」の名前を残している！）？！

とにかく、その双方の要素があるのかもしれないが、そうした移動（移住、拡散？）の事実が、その後の「委（倭）奴国」の行く末とも関わって、実に大きな意味を持っていると思われるのである？！と言うのも、実は、AD107年に、後漢へ朝貢したとされる倭国（倭面土わめど？国？）王「帥升^{すいしょう}」等が、その「委（倭）奴国」の、通常の（正統の？）後裔勢力であったのか？それとも、その後の「倭国大乱」をもたらした、新たな勢力であったのかどうか？その違いによって、その後の「倭国」全体の状況把握が、かなり異なったものとならざるを得ないのである（100余国→使訳通ずるところ30余国）？！

ただし、このことについては、例の「魏志倭人伝」によれば、いわゆる「邪馬台国（卑弥呼）」の出現以前には、当地は、70～80年間男王が統治していたということであり、おそらくこれが、その「帥升」王の系統とも考えられる？！そして、それがまた、素戔鳴命の話に投影されているとも考えられる？！

なお、ここでは、「邪馬台国（連合）」と敵対していたとされる「狗奴国」との境界？に、「もう一つの奴国」があった？！ひょっとしたら、それは、例の「（倭）奴国」の一員（協力者？）であった「隼人系？」の国（海洋交易の中継地→玉名地方・菊池川河口？）の可能性も、視野に入れておきたい（→二つの「奴国」は存在した→江田船山古墳／前方後円墳（銀象嵌名鉄刀出土））？！

そこで、もしそうであれば、そのことが、件の邪馬台国（連合）の出現（2世紀末？）に、どのように繋がっていくのかという、（九州）倭国初期の謎？に大きく関わるということであるが、これについては、「邪馬台国（連合）」期においては、かつての覇権国家？「委（倭）奴国」の存在が、かなり軽いものとなっていることは明らかであり（人口は多いが！）、一方で、その西隣の「伊都国」の存在が大きいものとなっていることも明らかである（そこには、代々「王」がいたが、その後？女王国に統属され、そして、「一大率」の常駐となり、諸国が畏怖していたということであった！）！

したがって、これまではあまり注目されていなかったようであるが、「伊都国」という、まさに「好字」で表記されているということも、ある意味不思議

であるが（他の諸国は、基本的には「卑字」が当てられている?!）、その伊都国と「邪馬台国」の関係が、改めてクローズアップされるのである?!端的に、「伊都国」と「邪馬台国」が協力して、大国「委（倭）奴国」の覇権を奪ったということが考えられないかということである（「一大率」の常駐は、それを如実に示している?!）！

ということで、もしそうであれば、これについても、改めて大変な史実?ともなるが、そうした「伊都国」の勢力（主力?）が、例えば「朱丹（硫化水銀）」あるいは「銅」、さらには「鉄」を求めて?、内陸部（九州中部?）の邪馬台国に移動したとも考えられ、伊都国の「太陽信仰」、あるいは「卑弥呼」の鏡好き?というような話にもつながっていくようにも思えるのである?!

また、その「伊都国」については、「いと（こく）」なのか、「いつ（→せ?）（こく）」なのか?それとも「いど（こく）」なのかという問題もあり（ただし、その後、その地域は「怡土（郡）」と呼ばれたので、原音は「いど」または「いと」だった?そして、後世（～現在）の「糸島（郡）」は、「怡土」と「志摩」の合体表記となっている!）、さらに、それに関わる伊勢湾岸の「伊勢・志摩」のセット的存在、そして、そこにおける「磯部（いそべ←いせべ←いとべ?）族」の存在と関わらせれば、両地方の関係は、俄然注目されるものともなる（彼らの後裔の「渡会氏」等が、かの「伊勢神宮」の創始者であったことも間違いない!）?!

さらにまた、紀州（和歌山県）の「伊都いと（郡）」の存在も気になってくる（そこには、例の「人物画像鏡」がある「隅田すだ八幡宮」（橋本市）、あるいは「朱丹」と関係がある「丹生津にゅうつ姫神社」等もある!）?!そしてまた、その対岸にある「海部あまべ（郡）」の存在は、「豊後」、「阿波」、「若狭」と共に、「海部族（海部氏）」の進出先を示唆するものでもある（そこには、同じ「海部郡」がある!）?!

いずれにしても、ここで改めて、「邪馬台国（連合）」時代の「諸国」の実態（実体?）についてであるが、要は、その時代までには、少なくとも、北部九州の「倭国（→「邪馬台国（連合）」）」と、それ以外の「倭人（種）の国」が、それぞれ関係を持ちながら、幾つか出来上がっていたということである?!

例の「魏志倭人伝」は、その中の、北部九州の「倭国」（邪馬台国（連合））についての情報ということであるので、その全体的な状況は分からないのであるが（「魏」と、冊封国の「倭国」（邪馬台国（連合））との関係の中での話であるので、当然である!）、「吉備」や「出雲」、そして、「播磨」や「河内」、「近江」「丹波」等にも、そうした「クニ→国」が出来つつあったということである?!

さらには、「信濃」や「関東」にも、そうしたものが出来つつあった（「穂高見国」や「扶桑国」等?）?!そして、それらが、まさに「倭国大乱」前後に生じたものであれば、その動きは、おそらく「倭（委）奴国」の人々の東方移動の結果と言えるのかもしれない?そういうことである?!

⑨「安曇族」と「カモ（鴨／賀茂）族」の東方移動?!おそらく、彼らが、「倭国→日本国」への最初の契機（原形）をつくった?!

ところで、以上のような、「邪馬台国（連合）」の出現前後（2世紀末?）における大変動は、海洋狩猟民／海洋交易民であった二つの部族、すなわち「安曇族」と「カモ（鴨）族」がもたらしたことは、ほぼ間違いないであろう?!彼らは、全国各地に拡散・進出し、それぞれの根拠地・ネットワークをつくり、その後の「倭国→日本国」への契機（原形）をつくったのである（各地に散在する「あずみ（あど）／あつみ」「しが／しか」、「かも」等の名!「なか」もある?!）?!

そして、彼らは、双方ともに、いわゆる「黒潮」に乗ってやって来た「江南系」の倭人（渡来系弥生人?）であった?!前者が北部九州（対馬海流沿い／日本海側）、後者が南部九州（黒潮本流沿い／太平洋側）への渡来ということであろうか?!誠に大胆な推理（妄想?）と言われるかもしれないが、少なくとも、かの「神武東征」のモチーフ（枠組み）から類推すると（「宇佐」で合流したように見える?）、このような出会い・動きが考えられるわけである?!

すなわち、北部九州の「安曇族」と南部九州の「カモ（鴨）族」が、何らかのきっかけ?で、瀬戸内海入口で合流し、「吉備」を経て（そこで力を蓄えて?）、近畿・大和へ移動・進出したということであるが、その「神武東征」のストーリーは、まさにそうした史実?から生み出されたものではないかということでもある（まったくの空想では、そうしたストーリーは創り出せない?）?!

なお、そこでの「安曇族」が「ワニ族（和邇氏／多氏／三輪氏等）」であり、いわゆる「海神わたつみ」、そして、「カモ（鴨）族（賀茂臣・朝臣氏／賀茂直氏等）」が、文字通り「カモ（鴨）」（※古語では「あじ」?）である?!ただし、「海神わたつみ」と対比される、もう一つの「山祇やまつみ」が、後者の「カモ（鴨）族」なのか?それとも、「物部ものべ族」の「火明ホアカリ or 饒速日ニギハヤヒ系」（物部氏／尾張氏／海部氏等）なのかは、今のところ、よく判断がつかない（ただし、後者は、後から入ってきた「伽耶・新羅系」あるいは「百済系」の集団ではある?）?!

ちなみに、同じ海洋系倭人と思われる「住吉族」（→津守氏）は、いわゆる「隼人系」と考えられ、以前から「安曇族」と行動を共にしていたが、「応神」の頃独立?して、瀬戸内海航路を掌握していた?!というより、「応神」と組んで、東進していた（淀川河口・住吉地区）?!だから、「記紀神話」では、「ホスセリ（海幸彦）」として、「ホオリ（山幸彦＝ホホデミ）」の兄に位置づけられた（そして、件の「ホアカリ」は、一番下の弟とされた!）?!実は、ここに、我が国古代史の大きな枠組みが示唆されているということでもある?!

いずれにしても、弥生期から古墳時代期にかけての我が国（倭国）の混乱と変貌のプロセスは、こうした「海人族（海洋系倭人）」の全国展開と、それぞれの部族・勢力の移動・進出、あるいは離合集散のプロセスでもあるということ

である?!そして、その大きな舞台が、北部九州であり、出雲・吉備であり、近畿・大和であったということである?!

もちろん、それらは、中南部九州、そして、丹波、越、信濃、東海、関東等にも及び(多分、韓半島南部にも?)、まさに、「邪馬台国(連合)」の解体(消滅?)後の3~5世紀の我が国(倭国)の状況は、そうした枠組みの中で、理解されなければならないということである?!

ただし、先の「カモ(鴨)族」には、2つの系統(途中から分かれたということか?だが、備前の「賀茂氏」を加えれば、三つとなる!)があることは、ここでは押さえておかなければならない?!すなわち、一つは、大和国「葛城かざらき」の「賀茂氏」(「葛城賀茂氏」=「賀茂造氏」等)。彼らは、「大国主命(大物主神?)」の子孫「大田田(直)根子おおただねこ」の後裔の「大鴨積/大賀茂都美おおかもつみ」を祖とし、「三輪みわ氏→大神おおみわ氏」と同族とされている。これは、おそらく、「出雲(「意富/意宇おお)」)と関係しているであろう?!

もう一つは、山城国「葛野かどの」の「賀茂氏」(「賀茂直氏」等)で、神武東征で、重要な働き・水先案内をしたとされる「八咫鳥やたがらす(カモタケツヌミ命)」を祖とする「葛野主殿県主かどのとのもりあがたぬし」系である。彼らは、後に「秦氏」と姻戚関係を結んで、大いなる権勢を振るった(→「上賀茂神社」/「下鴨神社」等)!しかし、彼らは、「吉備」を根拠地として(経由して)、近畿・大和に移動した部族であることは明らかである(例の「手焙形土器=前方後方墳勢力」の出発地である「吉備」には、件の「賀茂/鴨」の痕跡が色濃く残っている!→「賀茂西遺跡」/「賀茂遺跡」)?!

ということで、最初の「近畿・大和」の政権勢力は(一つのまとまった「国」ではないが?)、西から移動していった「安曇族(→ワニ族)」と「カモ(鴨)族」、そして「物部族」であったということになるが、最後の「物部族」は、おそらく、少し遅れて大和に入った「太陽信仰族」で、後に彼らは、「ホアカリ系」と「ニギハヤヒ(→ウマシマデ(ジ))系」に分かれた?!

そして、これも、おそらくではあるが、「吉備」に移動していた「安曇族(ワニ族)」は「意富氏」で、彼らは、「ワニ→龍神信仰族」であった?また、彼らは、「神八井耳命」の後裔とされる「多氏」であり、例の「大彦」も、その系列ではなかったか?!

ちなみに、東海・関東に見る「手焙形土器(前方後方墳)勢力」と「銅鐸(環濠集落)勢力」の攻防(前者による、後者の駆逐?)、そして、そこにおける、「太陽信仰(前方後円墳)勢力→物部族」の三つ巴の様相は、例えば武蔵国の「氷川神社」、あるいは常陸の「鹿島神宮」(タケミカツチ→中臣氏※ただし、本来は「多氏」のもの?)や下総の「香取神宮」(フツヌシ→物部氏)の地勢的配置等によって、ある意味容易に推測されるものとなっている?!そして、そこでの「手

焙形土器（前方後方墳）勢力」が「大彦命」、「太陽信仰（前方後円墳）勢力」が「武渟川別たけぬなかわわけ命」を示している（例の「四道将軍」の二人として?）?!そして、それは、そのまま、「倭国→日本」へと変貌していった、我が国の古代国家建設の、ある意味「縮図」ともなっている?!

すなわち、「崇神」による「四道将軍」の派遣、とりわけ、ここでは「大彦命」と、その子「武渟川別命」の東海・北陸・関東（一部東北まで!）への派遣話は、こうした、「渡来系」の人々の開拓（進攻?）話が、元になっているということである?!ただし、前者は、日本海側から、後者は、太平洋側からの進出の話と考えられる?!そして、そこでの覇権争いは、勢い近畿・大和の勢力構図を、大いに左右したものと思われる?!

参考までに、そこには、いわゆる高句麗系の人々の足跡も、同時に見られる!「高麗こま（川）」等の存在であるが、もちろん、当地は、開拓の余地がふんだんにあった地であったろうから、様々な人々、とりわけ「渡来系」の人々にとっては、まさに「新天地」であったわけである?!

それはともかく、ここで少し確認しておきたいことは、北部九州のことはともかく（関係はしていると思われるが!）、渡来系の人々の動きとして、中国山地の人々（「四隅突出型墳丘墓」を残している部族?まずは、三次地方から!）の出雲支配?の事実を、どのように受け止めるかである（その最盛期は、出雲西部の「西谷墳丘墓（3号墳）」?!東部の「意富（意宇）地域」（安来地区）と西部の「神門地域」（出雲地区）、これが、「意富」氏の支配地域であり、そこから分枝?した「出雲臣氏（出雲国造）」が、かの「出雲大社（杵築大社）」を奉斎した?!

そして、そのことが、例の「素戔嗚命」の出雲降臨と、その後の「大国主命」の国づくり、そして、天孫族への「国譲り」の話と連動しているのならば、その「四隅突出型墳丘墓」勢力が、「素戔嗚命」の出雲降臨に投影されていることになる?!ただし、「四隅突出型墳丘墓」は、もともと高句麗の地が発祥ともされるようなのであり、そうなれば、「意富（多）氏」は、そもそもが「扶余系」の氏族だったということも考えられる?関東の、「高麗（川）」等の地名は、それとの関係でみれば、さらによく理解できることとなる?!

しかし、いずれにしても、彼らと、「吉備」の龍王勢力との関係が、そこでは改めて問われてくる?!中国山地の「四隅突出型墳丘墓」の勢力（産鉄族?）には、吉備との繋がりがあったことは明らかであるが（「西谷3号墳」にその痕跡あり!）、では、その勢力は、まずは、吉備の方から、中国山地→山陰（→北陸→能登→富山）へと移動した?それとも、その逆なのか?件の「素戔嗚命（龍王そのもの?）」の出雲降臨（→八岐大蛇退治）のモチーフ等によれば、やはり吉備の方から、進出していったと言えそうではある?!

⑩「吉備」で力を蓄え、「出雲」→「近畿／大和」に移動（進出）した「ワニ（和邇/和珥）族」と「カモ（鴨/賀茂）族」?!

ということで、一方では、それらは、おそらく「天稚彦」と「味鋤高彦根（鴨族）」及びその妹の「下照姫」との関係も、そして、「吉備津彦」と「温羅」（出雲系?）との抗争（「桃太郎伝説」の原形?）、それに関わる「鳴釜神事」「阿蘇女（多氏?）」等の話をも包含しているのではないだろうか?とにかく、ここでは、「吉備」と「出雲」の関係が、改めてクローズアップされてくる?!

そこで、ここで、その辺りの大枠を確かめてみると、とにかく「吉備（足守川流域）」から出立した「太陽／龍蛇信仰族」（鴨?／和珥?／三輪・大物主族?）が、まずは「出雲」に進攻し（→「出雲の国譲り」?）、その後、「播磨」（一部、「丹波」へも!）、「河内」を經由し、一方は、淀川・木津川を遡り、「近江」「越」「東海」「関東」へ（手焙形土器→鴨／和珥族→意富氏→大彦系?→前方後方墳勢力）、そして、もう一方は、大和川を遡り、「大和」へ進出した（三輪・大物主族→物部族→前方後円墳勢力）?!

その後、両者は、（再び?）大和で合流したが、最終的には、後者が、大和を統一した?!その間（あるいはその後?）、前者の前方後方墳勢力（意富／多氏→「神八井耳」勢力?）は、九州方面にも進攻し、「吉野ヶ里」の環濠集落勢力等を駆逐した（おそらく「奴国」も?）?!そして、「邪馬台国（連合）」へも関与した（その後、彼らは、「火（肥）君」「阿蘇君」「大分君」等となった?さらに「筑紫君」も?）?!

しかるに、それらの証拠を示すものが、まさに「手焙形土器（「甕みか」?／火の祭祀用?→第1期／170年頃～第4期／3世紀半ばまで、ほぼ80年間?）」と、その（進攻）後に造営されたとされる「前方後方墳」の出現（彼らの征服の証し?）である!ちなみに、「吉野ヶ里」の環濠集落勢力の駆逐は、第3期（220年頃?）とされている（それは、ちょうど邪馬台国卑弥呼の最盛期と重なる?）?!

そして、この場合のこと（のみ?）が、「魏志倭人伝」に言う「倭国大乱」ということになるのかどうかはともかく、その大乱の影響（結果）が、北部九州での「邪馬台国（連合）」の出現と、他方での、近畿大和への「吉備（→出雲）勢力」（→後の「大和朝廷」）の結集は、おそらく間違いないということである?!したがって、問題は、それが、どういう形で進んだのかである?!

ということで、その大きな流れ（足跡）の一つとして、おそらく3世紀半ば頃に（もう少し後か?）、大和で、「物部氏（太陽信仰族?）」から主導権を奪われる「ワニ系氏族」、すなわち海人族を統属する「安曇族」（志賀島を本拠としていた!）の一部（王族?）が、北部九州での乱を避けて、「吉備」へ移動した（逃げた?）?!そして、そこで、船の移動と戦闘の役割を分担するような組織となった?!その後、彼らは、出雲・播磨・河内・近江を經由して、近畿大和の

「唐古・鍵遺跡」の環濠集落等に攻め込んでいった（その際、「足守川流域」で生まれていた「龍王／太陽信仰」を持ち込んだ？）?!

さらに、その一方で、その同じ勢力・集団の一部（神八井耳勢力?）は、その後、「国東半島」経由で、北部九州の「吉野ヶ里」の環濠集落等にも進攻して、「龍王信仰」と「前方後方墳」を九州にも持ち込んだ?!これが、吉備に集中する「龍王山」が、大和（纏向周辺）や豊後地方にも広がっている理由である（このことに関係する「天照御魂神社」の「龍王山と日の出」の関係も、古くからの「龍王信仰」と結びついていた「太陽信仰」と捉えることができる!）?!

なお、「龍王信仰」は「ワニ系」、「太陽信仰」は「物部系」と、大きく分けることができるが、繰り返すように、両者は、本来は（ある時期に!）、吉備の「足守川流域」で力を蓄えていた勢力の信仰形態である?!

ただし、それは、記紀神話の「タケミカヅチ」と「フツヌシ」に対応する「ワニ系氏族」と「物部系氏族」の違いからも明らかのように、前者が、「手焙形土器」と「前方後方墳」の勢力であり、「龍王」の子孫と名乗り、「龍王信仰」を為していた、新たに「近江」を地盤とした「ワニ系氏族」であり、後者は、新たに大和を地盤とし、「太陽信仰」、それ自体に傾斜を強めていった「物部系氏族」であり、彼らは、瀬戸内海の制海権を獲得し、「前方後円墳」を全国各地に生み出していった勢力である?!

そこで、ここで、いわゆる「欠史八代」のことを、こうした「吉備の勢力」の系譜とみると、ある面白い事実?が判明してくる?!つまり、古墳時代以前、出雲地方はもちろんであるが、古大和（三輪地方）にも出雲（神）族がいた!そして、その一族「（意）富_{おお}家→和珥氏?」によると（「富家家伝」）、初代から第9代までの天皇は、「（意）富家系」と「倭直系」が交代で続き、初代（神武）～第3代（安寧）は倭直系、不思議?と第4代（懿徳）は示されていないようであるが（母は「鴨族」!）、第5代（孝昭）～6代（孝安）は出雲（（意）富家系?）、第7代（孝霊）は倭直系、第8代（孝元）～9代（開化）は（意）富家系だったという?!

一方、これに関して、初期天皇の皇后は、少なくとも3代連続で「賀茂女_{かもめ}」（鴨族の女性）だったともされており（「記紀」では「事代主神」系?）、そうなると、最初の大和王権?は「倭直系」と「賀茂氏（族）」勢力によって現出されたことになる?!そして、「倭直」（→道臣／大伴・久米氏→吉備氏?）は、例の「珍彦（椎根津彦／棹根津彦→塩土翁?）」ともされるので、それは、まさに「神武東征」の軍勢と一致する?!なお、「三輪（大神／意富氏?）」が「（意）富家系」ということになるが、「三輪（大神／意富氏?）」と「賀茂（鴨）」は同族という面もあるので、そのことは、実は、上記のようなことを指すのかも知れない?!

そこで改めて、「賀茂氏(族)」とは、いかなる氏族・勢力(部族)であったのか?!すなわち、その存在(活躍?)、他の氏族・勢力の、彼らとの関わりが気になってくるのである!さらにまた、祭祀に関わる「日」と「火」の関係から、大和(三輪)・伊勢・丹後、そして出雲の関係が浮かび上がってくるのである?!果たして、その実体はどのようなのか?!

例えば、その「カモ族」の始祖?とされる「(カモ)建角身^{タケツヌミ}→八咫鳥^{ヤタガラス}」は、南九州の「曾」の出身であるとか、あるいは、彼がそのモデルとなっていると思われる?「神武」の東征先の重要寄港地?「吉備」には、「カモ」の名が厳然とある!そしてまた、奈良、京都をはじめ、全国各地に「カモ」の名が残されているが、実は、吉備の「賀茂西遺跡」が、「手焙形土器」(「火」の祭祀用?)の発祥の地(「カモ族」の出発地?)であったようでもある?!

したがって、本来(最初?)の「火」の勢力が、この「カモ族」であった、あるいは、その「カモ族」を中心として、「火」の勢力(→前方後方墳勢力?)が形作られたということであった?!ちなみに、第10代崇神は、第8~9代の(意)富家系と直接の関係があることになり、それは、彼と「饒速日^{ニギハヤヒ}」、そして、彼と「トミ(鳥見→富?)の長脛^{ながすね}彦」の関係ということにもなる?!一般には、第2代綏靖~第9代開化までは実在とはされていないが(→「欠史8代」)、本当は、初期の「三輪王朝」のことを指しているのかもしれない?!

参考までに、「前方後方墳」「手焙形土器」出現の「2期=190年~210年」「3期=210年~230年」の時期には、「孝昭天皇」系の「ワニ氏」と「孝元天皇」系の「アベ氏」が分岐し、「龍王信仰」を近江に伝えたのはワニ氏である!

いずれにしても、ワニ系の始祖とされる「孝昭天皇」(「手焙形土器」と「前方後方墳」の勢力)、物部系の色合いが濃い「孝霊天皇」(「前方後円墳」の勢力)、アベ系の始祖とされる「孝元天皇」(その子の「大彦」勢力)が、吉備の勢力に連なる系譜の持ち主ということになる?とは言え、それら吉備の勢力は、一体どこから来たのかである(北部九州(糸島?)と南九州(日向?)からか?)?!

そこで改めて、以前私が想定したように、初代「神武」が、後の「応神」の創出?のために必要とされた仮想の天皇であり、そのモデル(ダミー?)が、「カモタケツヌミ(八咫鳥)」であったとすれば、事実上は、彼(→賀茂氏(族))が、実際の(記紀に示された)「神武」の事績を担ったことになる?!

つまり、(南部)九州から、宇佐→(岡=遠賀)→吉備経由で、「東征(実際は移住?)」してきた「賀茂氏(族)」が、大和「葛城」の地で、まずは「三輪氏族」(「出雲(大国主/オオナムチ命)」と結びつけられた?「大物主」勢力)と合流し(→葛城王朝?)、そこに、後から乗り込んで来た「饒速日→吉備(物部?)勢力」と、三輪山(纏向)で大同団結し(三輪王朝、ひょっとしたら「崇神王朝」かも?)、それが、まさに「(初期)大和王権」を形づくることになった?!